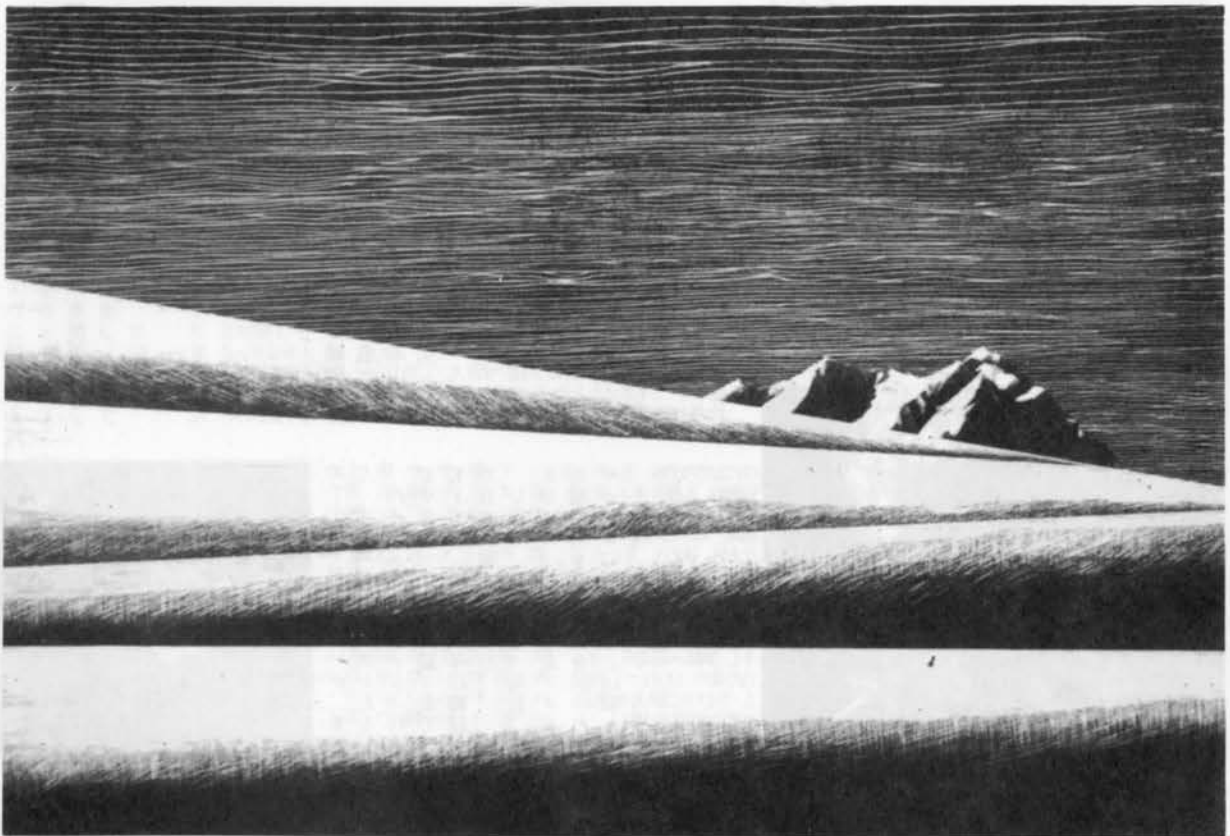


山と博物館

第26巻 第7号

1981年 7月25日

大町山岳博物館



岳 板絵 齊藤 清

涼風所感

NHKテレビの「シルクロード」は人気が高いという。シルクロード関係の本や写真集も売れているという。恐らくこれは、あまりにも多くのモノを生産しすぎた人間が、モノから最も遠いと思われる遙かな辺境の地に、失った何かを見出して、限りない憧憬を抱くからではないだろうか。

しかしNHKの「シルクロード」の魅力は、映像の他にもう一つ喜多郎の音楽にある。シンセサイザーの、澄んだ艶やかな音色が快く響く。それはゆったりとしていて、おおらかな、のびのびとした感じ。大草原や大砂漠の画面をバックにしなくても、この音楽は茫洋たる遙かなイメージを喚起する。どこか遠くへ、無限の世界へと想いを導く。悠久、永遠などという言葉が、日常用語の中から消えて久しいが、彼の音楽には人間という小さな存在を超えた、もつと大きなものを信頼し任せた、作意を超えた自然さがある。

インドの大学で音楽を学んだ小泉文夫氏によると、インドでは一人の人間の主観的な作意や真実などというものは、たかが知れている。伝統的音楽の中にこそ、個人を超えた永遠の真実があると、ただひたすら古いもののみ教えられたという。近代的自我の主張をなによりも尊しとする世界とは違った、悠久の世界がそこにはある。それは喜多郎の世界にも共通する。彼の音楽の心地よさ、懐かしさは、そういう虚構を捨てた果ての、自然との一体、宇宙との交感の中に、身を溶かすことからくる安らぎではないだろうか。

この喜多郎は、山岳博物館のすぐ裏山を登り切った部落に住む。山博周辺の山里には、そんな音楽家や画家などが、年々移り住むようになってきた。時代も隣の村々も、少しずつ変貌しようとしている。夏の日の一夜、喜多郎の音楽を聞きながら、彼と自然と宇宙について語る、などというシャヤれた企画が山博にあっても、と思ったりもするのである。

(小林 明)

高山・亜高山の稀少植物

高橋秀男

日本アルプスにおける植物の垂直分布を優占種によって見ると一七〇〇米位から上位にシラビソ帯が現われ、二五〇〇米からハイマツ帯、二八〇〇米から上部をヒゲハリスゲ帯として区分することができる。これを垂直分布帯にあてはめると、シラビソ帯とハイマツ帯を亜高山帯(針葉樹林帯)、ヒゲハリスゲ帯を高山帯に相当する。従来シラビソ帯を亜高山帯、ハイマツ帯とヒゲハリスゲ帯を高山帯と呼んできたが、シラビソ帯とハイマツ帯とは種組成や植生からもよく類似し、亜高山帯として一括するのが適当である。両者に分ける場合は上部亜高山帯(針葉低木林帯)と下部亜高山帯(針葉高木林帯)とする。したがって、シラビソ帯とハイマツ帯に生えるものを亜高山植物、ヒゲハリスゲ帯に生えるものを高山植物と呼ぶのが妥当であるが、両者は必ずしも厳密に区別することは難しい。

亜高山植物はハクサンフウロ、シナノキンバイ、コバイケイソウ、クルマユリなどで一般に丈が高く、葉の広い種類が多く、雪崩道やダケカンバなど陽地に生育するものと、コイチヨウラン、フタバラン、ジンヨウイチヤクソウのように針葉樹の暗い林内に生える小形のものがあがる。

一方高山植物はオノエスゲ、ヒゲハリスゲなどのように葉の細い種類やオヤマノエンドウ、ウスユキソウ類のような小形の草本、チヨウノスケソウ、ミネズオウなどのような低小木が中心をなしている。

最近山草屋の店頭で、キタダケキンボウゲ、ヤツガタケキンボウゲ、コマクサ、ホウオウ

シャジン、イチヨウラン、ホテイランなどの稀少な高山植物が大量に売られているのを見かけた。一部には明らかに山取りとわかるものもあつた。依然このような稀少植物を採取し、売買の対象としている不心得者がいることは誠に残念でならない。全ての高山、亜高山植物の栽培、売買を法で厳に禁止しなければならぬことを痛感するのは私一人ではありません。山草ブームは天上知らずで、本屋に並ぶ園芸書を開けばどの本も一様に高山植物(山草)の栽培法についてふれている。これらによる啓蒙も大きいことを考えると、執筆者諸兄にも自重を望みたいものである。さてここでいう稀少高山、亜高山植物も地域を日本アルプスと八ヶ岳連峰に限定し、採取されることのないことを念願して、若干の種類解説を試みたい。

亜高山植物

ミスズラン(ラン科) 八ヶ岳連峰や浅間山など本州中部高山の針葉樹林内に生育する。最近中央アルプスと北アルプス常念山脈でも発見された。花は小形で緑色、目立たない。

コハクラン(ラン科) 幻のラン。コハクラン(ラン科)とラベル付きで売られているのをデパートで見ることがある。

八ヶ岳連峰、樺形山、南アルプスなど本州中部高山の針葉樹林内に生え、前種とほぼ同じ分布域を占める。山麓に生えるコケイランに似ているが、別の属でそれより高所に生え、葉の折れ目が著しく、中央脈は白く、花は紅紫色を呈し、半開きで完全に開かない。

他にコケハナワラビ(八ヶ岳)、イナダシダ(豊口山)、シロウマイタチシダ(白馬、爺ガ岳、黒部)、ニオイシダ(八ヶ岳)、ホテイラン(南ア・八ヶ岳)などをあげることができる。

高山植物

タカネマンテマ(ナデシコ科) 周北極地方に広く知られるが、日本では南アルプスに遺存分布する。花は極めて小形で目立たないが、萼が大きな袋をなす。十本の暗紫色の脈がある。

ハイツメクサ(ナデシコ科) 大井次三郎氏が小泉源一氏の白馬鍾ガ岳で採集した標本に「日本新産を報告した。」

しかし、原寛氏は一九五二年に日本産植物とヨーロッパおよび北アメリカ産との関連ある植物群を比較研究を試みた際、ハイツメクサが日本に産することは疑わしいとされた。その後、一九六三年に大場達之氏が朝日岳で採集したが、筆者らはこの標本にもとずいて、白馬、後立山連峰のフロラ(一九六九年)に新産地として報告した。また一九七三年九



ハイツメクサ



キタダケキンボウゲ

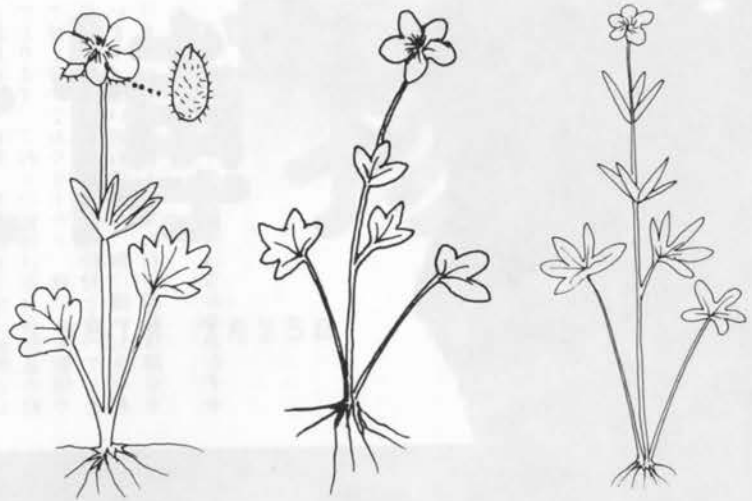
月には信大の和田清氏と山博の平林国男氏によって朝日岳で再確認し、筆者に標本も送られてきた。私は一九八〇年八月に白馬鍾ガ岳を訪れ、始めて開花期の生態をカメラに納め、外部形態については神奈川県立博物館研究報告十二号に報告することができた。周北極地方に広く分布しているが、日本では白馬連峰に限られ、石灰岩地や超塩基性岩の砂礫地や雪田底などに生える。

キタダケソウ(キンボウゲ科) 北岳の固有種。類似種にはアポイ山にヒダカソウ、北朝鮮にウメザキサバノオが知られる。本種はウメザキサバノオに近縁で、同一種またはその変種に扱われたり、またそれぞれを別の種とする説もある。北岳の東向き斜面に生育範囲が極限され、個体数も少なく、日本の最高所に分布する最貴重植物といえることができる。花は白色、花弁は六―八枚あり、六月の雨期にひっそりと咲き、登山シーズンには果実を結んでいる。

キタダケキンボウゲ(キンボウゲ科) 高山性のキンボウゲ属には固有種や遺存種が多いが、本種もその一つで、南アルプスの白峯三山に固有の種である。

ヤツガタケキンボウゲ(キンボウゲ科) 八ヶ岳の固有種。前種によく似ているが、全体に毛が多く、葉の裂片は鈍頭であり、他に葯や花弁の形も異なっている。

クモキンボウゲ(キンボウゲ科) 周北極地方に広く分布する種で、日本では北海道に、かけ離れて白馬連峰に見られ、生育



タカネキンボウゲ

クモマキンボウゲ

ヤツガタケキンボウゲ

地はカール底の積雪が遅くまで残るような岩場である。ハイツメクサ、タカネキンボウゲなどとともに氷河遺存植物として貴重である。
タカネキンボウゲ(キンボウゲ科) かつて白馬連峰の固有種とされ、学名もラヌンクルス・シナノアルピヌスの名がつけられていたが、大井次三郎氏は最近周北極地方に分布する *Ranunculus sulphureus* Soland. と同一種であるとの見解を発表された。本種はしばしばクモマキンボウゲと同一場所に見出されるが、がく片に黒い毛があるので識別は容易である。
アカイシリンドウ(リンドウ科) 南アル

本の割に大きく、青紫色の五弁花が上向きに咲き、可憐な高山植物である。
サンブクリンドウ(リンドウ科) 近似の種は大陸のアルタイ山系に分布し、本種はその亜種とされる。南アルプスの風衝草原にヒメセンブリやアカイシリンドウとともに見られ、花期は遅く他の花が咲き終わった九月である。
ヒナリンドウ(リンドウ科) ヒマラヤ、シベリヤ、コーカサスなどに分布し、日本では八ヶ岳に限られ、少し湿った草地に生育している。茎は軟かく長さ三十七センチ、花は七月、色も形もタテヤマリンドウに似ている。

ブスと白山の固有種。南アルプス産は従来シロウマリンドウとされてきたが、筆者は一九七一年古瀬義氏の標本にもとずき、別の分類群として、学名を *Gentianopsis funusei*、和名をアカイシリンドウと命名した。
 花弁の縁がひげ状に細裂するところはシロウマリンドウと共通であるが、花は紫色―淡紫色で、花柄は短かく、分枝が多い。
シロウマリンドウ(リンドウ科) 白馬連峰の固有種。花柄は分枝少なく一―二個で長く伸長し、花は白色で基部のみ紫色をおびる。
 しかし、最近花弁が全体紫色をおび、しかも花柄の長く伸びる一群が白馬鍾ガ岳に分布していることを、植物写真家の木原浩氏が写真をそえて私に教えて下さった。本年はその現地を訪れ調査したいと思っている。
ヒメセンブリ(リンドウ科) 周北極地方には点々と分布しているが、日本では南アルプスと八ヶ岳だけに知られる。花は草



ヒナリンドウ

筆者も昨年念願かなって生態写真をとることができたが、その生育環境はごく限られ、稀少価値の高い植物であることを知った。
コヒナリンドウ(リンドウ科) 前種に緑の近い種であるが、それより若干大形で、茎は硬く、花茎の分枝も多いが、花は少し小形のようにあり、花期は一月ほど早く六月である。南アルプスの固有種で、日光も分布域としてあげられているけれども、日光産はフデリンドウの小形品を誤認したものといわれる。
コケコゴメグサ(ゴマノハグサ科) 中央アルプスの高山風衝草原に生え、他の山では見られない。外見ではコバノコゴメグサやミヤマコゴメグサに似ているが、全体が著しく小形で花冠の内部もかなり異なっている。筆者が一九七六年の植物学会でコケコゴメグサと新称、発表したが、まだ学名はつけていない。



ヒメセンブリ

こうして書いてくると大半がキンボウゲ科とリンドウ科で占められてしまったが、他にチシマヒカゲノカズラ(白馬、南ア)、キタダケデンダ(北岳)、ヒイラギデンダ(北岳) センジョウテンダ(南ア)、タカネナルコ(南ア、北ア)、タカネシバスケ(白馬)、カラフトイワスケ(南ア)、ツクモグサ(八ヶ岳、白馬)、チシマツメクサ(白馬)、ハクセンナズナ(仙丈、木曾駒)、オノエリンドウ(八ヶ岳、荒川岳、白馬)、ホウオウシヤジン(南ア)などもこの部類に入るであろう。
ヒゲナガコメススキ(イネ科) 大場達之氏が一九六七年に白馬鍾ガ岳で発見し、翌年北岳でも見出した。白馬鍾ガ岳産については白馬、後立山連峰のフロラ(一九六九年)に写真をそえて報告したが、昨年訪れたときにはその場所に崩壊が起り、見られなくなりました。小花に長い芒があり、それに羽毛状の毛がついているので一見してそれとわかる。
コマウスユキソウ(キク科) 中央アルプスの固有種。二六五〇メートル以上のやや安定した砂礫地や岩角地に生える。日本産ユキソウ類のなかではもっとも小形で、頭花の数が少ない。近縁の種は遠く離れた東北地方の高山に分布するミヤマウスユキソウである。



コヒナリンドウ

花崗岩こうこうのいろいろ

平林照雄



笹平型花崗岩の鉱物顕微鏡写真
右上は石英、右下は黒雲母
左上は斜長石、左下はカリ長石

北アルプスの山麓に住む私達には、花崗岩(御影石)は目につきやすい親しみのある岩石です。高瀬川の上流にはいろいろの花崗岩が分布しております。したがって高瀬川の河原には上流から運ばれてきた花崗岩の礫や、それが風化した砂が堆積しており、白っぽく見えます。安曇平の土壌も花崗岩質です。

花崗岩は一般に図のように長石(カリ長石と斜長石)、石英、黒雲母を主成分鉱物としております。これらの鉱物は完全な結晶の粒で接し合っており、熱による膨張や収縮でばらばらに風化し、砂粒となつてしまします。堅い岩石ですが、熱に弱い欠点があります。堅い岩石ですが、熱に弱い欠点があります。堅い岩石ですが、熱に弱い欠点があります。堅い岩石ですが、熱に弱い欠点があります。

花崗岩の成因や化学成分はなかなかむずか

しい専門的な分野にはいりませんが、ここでは肉眼で観察する程度にとどめて説明致します。肉眼的に分けるには、鉱物の種類、結晶の大小や状態、カリ長石の色をポイントにします。専門的には鉱物顕微鏡で観察したり、化学分析にかけたり、放射性鉱物で年代を出したり、野外調査で成因や形成時代を探るなどするのです。

高瀬川渓谷には数種類の花崗岩が露出しており、花崗岩を中心とした火成岩の勉強には好適です。概略の分布は図に示しました。わかりやすく地名をつけて命名してあります。

一、金沢型花崗岩、白色中粒黒雲母花崗岩で、カリ長石も斜長石も乳白色です。黒雲母の他に角閃石をかなり含んでおり、金沢付近に岩脈状に分布し、最後に固結したものです。

二、笹平型花崗岩、白色粗粒黒雲母花崗岩で、カリ長石も斜長石も乳白色です。笹平付近や竜川支流のヨセ沢付近に分布しております。

三、北葛型花崗岩、紅色粗粒黒雲母花崗岩で、カリ長石は淡赤色、斜長石は乳白色です。

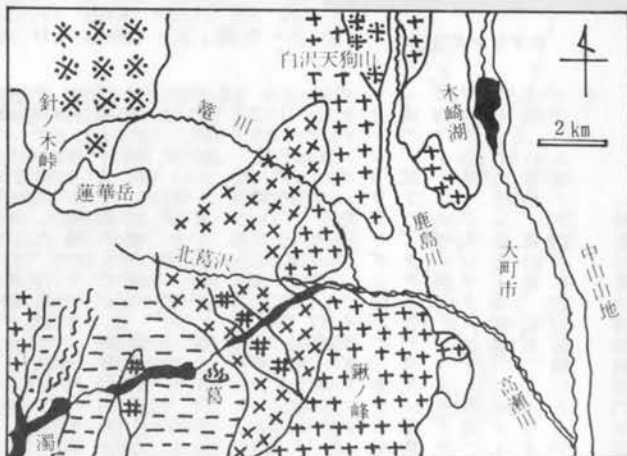
北葛沢出口から安曇平の間と、裏銀座連峰にあり、最も広い分布を示しております。北葛型は笹平型と移り変わっており、両者の岩質は同じです。時々角閃石を含み、風化に対しては弱い花崗岩です。

四、葛型花崗岩、灰色粗粒黒雲母花崗岩でカリ長石は淡灰色、斜長石は乳白色です。力を受けて岩相は複雑になっており、高瀬ダム付近のものは片状圧碎性花崗岩になっております。一番初めに出来た花崗岩です。

竜川の上流部には花崗岩のマグマが周囲の岩石を取り込んだ捕獲岩の多い白色中粒または細粒花崗岩があります。また、鹿島川中流域には角閃石を多く含んだ白色粗粒黒雲母花崗岩が分布しております。

一口に花崗と言っても注意して見るいろいろなあります。また、風化のされ方でも同じ花崗岩が全く外観を異にします。高瀬川でいろいろの花崗岩を採集して、標本を整理して楽しみながら勉強してみてください。詳しく勉強する人のために参考書を紹介しておきます。

- 北アルプスの花崗岩類、地質学雑誌七〇巻 柴田秀賢・原喜久男、一九五四。
- 故郷の自然、長野県地学会発行、平林照雄 一九五五。
- 日本北アルプスの火成岩、長野県の地学Ⅲ 平林照雄、一九五八。
- 松本盆地西側の花崗岩の節理系と断層系、地質学雑誌七一巻、平林照雄、一九六五。



高瀬川流域の花崗岩

北安曇誌、第一巻、自然地形地質、平林照雄、一九七二。
高瀬川流域の地質、高瀬川流域自然総合調査報告書、平林照雄、一九七四。
(大町北高等学校長)

山と博物館 第26巻 第7号
一九八一年七月二十五日発行
発行所 長野県大町市TEL②〇二二一
印刷所 長野県大町市後町 大町山岳博物館
大糸タイムス印刷部
定価 年額一、二〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野一三、二九二)